

環境問題と下水文化

(その生活文化論的アプローチ)

嘉田由紀子

皆さん、今日は。ただいま紹介に預かりました滋賀県琵琶湖博物館開設準備室の嘉田でございます。

下水と人間のかかわりを工学や経済学、あるいは現場の実践課題とあわせて、文明論、文化論的視点から考えようというこの学会の趣旨に賛同し、今日はお伺いしました。「環境問題と下水文化」、副題として「その生活文化論的アプローチ」ということで少し問題提供させて頂こうと思います。

今日のテーマは四点にしばらくしていただきました。最初に「広義の環境問題と狭義の環境問題」ということで言葉、あるいは定義の問題をふれてみます。二点めとして「水と人間の環境文化史―特に琵琶湖

地域の歴史から」ということで、琵琶湖地域にしばらくですが、現在の水環境問題の歴史的背景をさぐってみます。三点目が「高度経済成長と水のくらし」ということで、特に高度成長時代を経て私達の水との係わりがどう変わったのか、その時代のことを私達自身は経験として知っているわけですが、改めて社会変動の過程として捉えなおしてみようということ。それから四点目は、「環境認識と身近な環境」ということで、環境と人間のかかわりを認識論という視点から見直してみたらどうなるか、ということの問題提起をさせていただきます。そして、認識、あるいは解釈、研究するだけでなく、参加的行動へと私たちが実践段階へすすむ流れについて考え

てみたいと思います。

ちょっと個人的なことですが、今日ほどのような立場からお話をさせていただくのか、自己紹介させて頂きます。私自身は環境問題、特に水環境問題に文化人類学あるいは環境社会学的視点からのアプローチが必要ではないか、ということで過去十数年にわたり、琵琶湖地域を基本的フィールドとして研究、実践を行ってきました。ついでに子育てをしたり家庭の主婦をしたり、いろんなことをしてきました。学問研究の理論あるいは分析の世界と自分の日常生活の間に溝をつくりたくない、つまり一環した生活思想をつくりたいという思いで研究と実践に携わってきました。そのような経験をふまえて、かなり独断的な側面もあるうかと思いますが、話題を提供させていただきます。

△琵琶湖問題とのかかわりのきつかけ▽

一九八一年のことですが、「琵琶湖の環境問題に人文系の立場からアプローチしてほしい」という要

望を、ちょうどその時発足段階にあった琵琶湖研究所の吉良龍夫所長からさされました。一九七〇年代初頭、アメリカ留学していた時代から経済発展と社会問題、あるいは開発社会学や、環境問題に対するエコシステムアプローチという勉強をしてきた関係で、私自身は、おもしろそうなテーマだということで、その仕事をさせてもらうことになりました。

ただ、その時代まで、環境問題は自然科学の人間が対象とする領域という考え方がかなり強くありました。例えば「水がきれい、汚い」ということに対してどうやって技術として答えをだしていくのか、あるいは水俣病のような問題でしたらどうやって医学的に解明していくのか、というような志向性の強い時代でした。

そこで、環境問題についてかかわっておられる研究者の方たちに「琵琶湖が汚いとはどういうことか」という聞き取りをしました。その中である陸水学の先生は、「私達は水の汚れは扱わない」とおっしゃったのです。陸水学といっても領域は広いので

すが、その方は、水質を規定している湖の中のリンや窒素がどういうふうに循環しているかということ専門にしておられました。そして「私達は水の汚れは扱わない、物質循環のメカニズムをみるだけで汚れているか否いかを決めるのは人間だ、つまりあなた達だ」と言われました。

その時にハッとしました。そうなんです。自然科学として自然界の事象をできるだけ客観的に考えようとしたとき、そこには汚れているとか、汚れていないとかいう物差し（判断）はもちこめないのです。かねてから科学論としても課題になっていた

「科学の伽倻性」の問題です。それから、衛生工学の或る先生にトリハロメタンの危険値の話を伺に行ったときですけれども、「WHOなどいろいろな基準を出しておりますが、トリハロメタンの人間の生命に対する危険度、例えばある濃度のトリハロメタン濃度のどの段階まで人は受忍できるのか」という議論をさせられた時のことです。その方は、動物実感などの値をもとにして、いろいろな確率値

をだす。例えば、十万人に一人がガンになる確率、百万人に一人がガンになる確率あるいは一千万人に一人がガンになる確率、その数字は科学者として出せる。しかし「どの数字を選ぶかは社会が決めることです。科学者自身は決めることはしない」と。

この話も良く分かりました。どのような値で合意するのか、それは直接の当事者である住民や行政関係者などが、「社会的に合意する」ことであった、いわゆる専門家といわれる人がきめることではない。でも、難しそうな化学物質の名前や数式、などがあらわれるとたん、私たちは「わからないから専門家がきめてほしい」と依存してします。その判断は本来普通の生活者の感覚で、「こういう部分はこのような理由でこのようにして選ぶ」あるいは「ここまでは我慢できるけれど、これ以上は我慢できない」という、そういう社会の側としての意志決定が必要ではないか、とその時以来、感じているわけです。

△当事者の視点から▽

それが十年ちょっと前です。ですから人類学や社会学という領域からのアプローチが必要だということとを、それ以来強く感じて、それが私自身の研究の動機でもあります。ただ、その後も、私自身は、現場で具体的な事例に出会うたびに悶々とするのが大変多い。

というのは、社会なり人間の側から環境問題にアプローチするときのその多様な幅の問題、それから私たち自身が、自分達を無力だと感じている点です。難しいことは誰かが決めてくれる。行政が決めてくれる、あるいは専門家が決めてくれる。大学の先生が決めてくれる。白衣を着ている人が決めてくれる。私達には関係の無いことだと思っている人がとても多い。あちこち講演などに出掛けましても、極端な事例では、自分の家の前を水路が流れており、「先生この水路汚れているんですか、汚れていないんですか、決めて下さい」と言われたりする。自分の家の前の水路が汚れているかいらないか先生決めて下さい、あるいは行政で決めて下さいと言われたときに皆さんだったらどうお答えになるでしょうか。

たとえば、ある水の流れのある瞬間の有機物濃度がBODで五PPM、環境基準ではA類型、環境基準を越えているから汚れてますよと言うのかどうか。確かに環境基準というものは社会的に合意された目安です。でもその目安だけがひとりあるきしてしまっているのかどうか。汚れているということと、その川の目の前で暮らす人の主體的な判断ぬきに、決めつけてしまっているものなのか。たとえば、そこで生まれ育った人にとっては五PPMだとしても、「昔はここでお茶碗洗ったのに」と言う人達にとっては、昔との比較というモノサシがあって、汚れているという判断をするかもしれない。しかし、町から最近引っ越してきた人で、自分達の住んでいた所の水と比較して、「あ、この水は澄んでる、魚も泳いでいるしきれい」という判断をするかもしれない。環境というのは主体の意志を抜きには実は判断できないのではないか。その主体というときに、

誰が当事者なのかということを考え、その当事者の見方からデータを積み上げていくというのが、実は過去十年程私達がやってきたことです。

ただ余りにも道は遠いんですが、今日はその中でいくつか苦悶してきた事も含めてお話しをさせていただきますと思っています。

△広義の環境問題と狭義の環境問題▽

今、一般に環境問題といわれている問題を整理してみました。図一に示してあります。狭義の環境問題と広義の環境問題と分けてみましたが、狭義の環境問題というのは、新聞あるいはマスコミなどを通じて「社会問題化している問題」あるいは行政的に扱われている問題と考えて頂いて良いと思います。

その中に大きく地域環境問題と地球環境問題を考えております。地域環境問題としては大気汚染、水質汚染、いろいろございますが、私達は最近、景観あるいは風景の破壊というものも大きな地域の環境問題だろうという立場をとろうとしております。ま

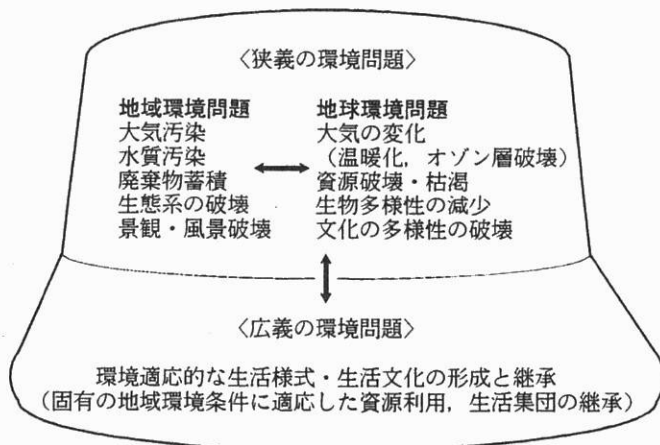


図1 広義の環境問題と狭義の環境問題

た、一般にはアメニティの問題などが言われております。

それに対して地球環境問題、これには大気の変化あるいは自然の破壊、生物の減少がございますが、文化の多様性という問題も考えたい。一九九二年のブラジルの地球サミットの折り、生物の多様性と併せて文化の多様性ということが言われ始めました。

このような狭義の環境問題の根っこには実は広義の環境問題がある。環境、つまり私達の身の回りにある大気、水あるいは生き物、植物、動物にしても私達の身の回りにおける存在とどうやってやりとりしながら、人間は生活なり文化を成り立たせていくのかという、そういう人間の生存の根本にある問題を、広義の環境問題と考えています。ですからこれからお話しすることは、この両方をつなぐ問題だということをお大前提にさせて欲しいと思います。

△水を人間をめぐる環境文化史

Ⅰ琵琶湖地域の歴史からⅡ

さて、極めて具体的なお話しに入りますが、まず、かつて、私たちは日常生活の中でどのように水とかかわってきただのか、その事例を琵琶湖地域の経験からお話しさせてもらいます。例えば、上水道の普及率というところから整理してみます。上水道の普及率は滋賀県では昭和三十年が五%です。その時全国平均は四十%です。現在はそれが九十八%です。昭和三十年から現在まで、五%から九十八%までという、上水道普及率のデータがあるのですが、では昭和三十年頃に残り九十五%、つまり上水道の入ってなかったところではどんな水をどんなふうに使っていたんでしょう、ということを経済資料や本報告書などを調べてみたのですが、何にも資料がありませんでした。つまり上水道以前のことは行政部局でも扱う部所がありませんし、誰も調べていない。そこで、一九八一年から一九八三年にかけて水と人間のかかわりについて、いわば生活現場での具体

的なフィールド調査を仲間と行ってきました。その時の大きな発見のまず第一に、水の文化は人間が造り育てたものであるということです。例えば、川一つみてもこれは人工的存在である。川というのは自然のように見えます。あるいは田圃も水路も自然と言われます。これはちょっと考えたら分かるように決して自然では無い。人が造り続けたものです。典型的なものは天井川でして、天井川というのは洪水になっては人が土砂を積み堤防を造り、又洪水になっては土砂を積み堤防を作る。いわば人と水の闘いの歴史をつつみこんだものが天井川です。

そういう風にみると、例えば、堤防一つでも、それは人間が営々と造り続けたものです。溜池でもそうです。それから森林、最近でこそ里山の問題などが社会的に関心を呼んでいます、日本の山、特に人の暮らしの近くにある山というのは決して自然では無い。特に日本の農業は、下草や小枝を堆肥として使うという文化をつくりあげてきました。

また飲料水、生活用水というのも、身の回りに有

る身近な水をいかに上手く使うかという意味で、大変な苦勞をし、人の手と人の意識が加わって確保されてきた。

今日の水の使い方というところでは、私達の仲間でもあるんですが、下水文化活動のところ、岡田玲子さんが大変緻密に、一軒一軒の家の中でどうやって台所の水を取り、どうやってそれを排水として利用したかということをお話しして下さいましたが、このあたりがこれまでほとんど調べられていなかったわけです。

排水との付き合い方ということで、ひとつの大きな発見は、そもそも排水とかあるいは廃棄物に対する考え方が、たとえば昭和三〇年代と現在とは異なっているということです。その一つの典型的な事例を、滋賀県のマキノ町の知内という地区の例で紹介します。ここは、見たところごく普通の農村にみえます。その集落の中に、幅三メートルほどの、これもどこにでもありそうな川があります。前川と呼ばれています。その川と集落の人達の付き合いが、

一つのかなりきれいなモデルを提供してくれました。
昭和三〇年頃のこととしてみてください。

図二にしたがって説明しましょう。川というのは空間的利用、水そのものの利用、生物の利用という側面があります。

まず、空間的利用としては、交通路です。琵琶湖の湖岸に近い所ですからクリークとして田圃との行ったり来たりも舟を使っている。あるいは空間を、遊ぶということで子供達は川にたらい舟を浮かべたり、あるいは井堰の堰の所はちょっと深くなりますね。そこに飛び込んだり、水遊びの場だった。

それから水そのものはどう使っていたかということですが、川の水そのものを飲料水として使っていました。施設としては、その川の横にカワタ（カバタ、カワド）という石段がある。水を田圃の用水、水田用水にも使いました。これは井堰という施設がある。防火用水、川の横にいざ火事というときに板をしつらえて水を溜める堰がある。

それから川の中にいる生き物も利用されていた。

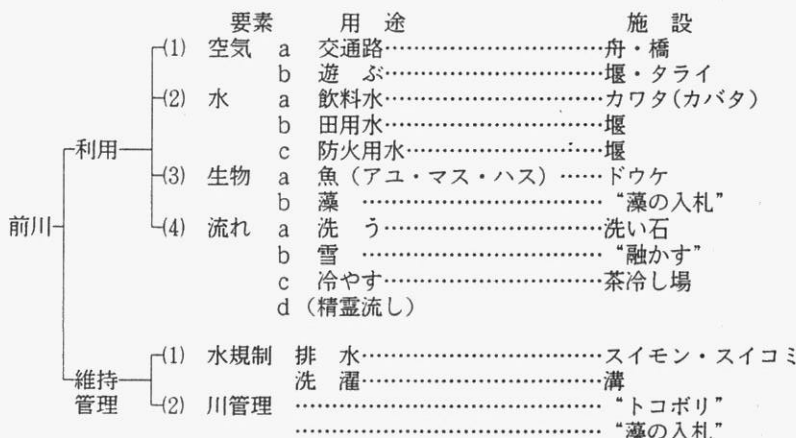


図2 琵琶湖岸のある村の川の利用と維持（原図：古川 彰）

ここの川はアユあるいはビワマスなどが、琵琶湖からあがってきます。季節によって、いろいろな魚をつかまえて、食糧などにしていた。また子供も魚つかみなどをして遊んだ。また、水草は今でこそ邪魔者ですが、それを春先から夏にかけて、二回から三回、村中で共同作業で取り上げます。取り上げた水草はどうするかというと、入札に掛けて肥料に使うわけです。一山百円とか二百円とか、そういうふうにして肥料として使われていた。

川の流れそのものをどう使うかということですが、れども、まず洗うという利用があります。お米を洗ったり、野菜を洗ったり、衣類を洗った。ちょっと雪がある所では雪を解かすという、そういう作用も川として重要です。それから冷やす。これは夏でしたらお茶を冷やす、スイカや飲み物を冷やす場所として川を使っていた。

お精霊（しょうらい）流し、というのもあります。これはお盆に仏さま、御先祖様をお送りするときに川から琵琶湖へむけて流しました。そういうお精霊

流し、これらがいわば川の利用の側面ですが、それを維持管理する側面というのがあります。

図では、「水の規制と川の管理」というふうに分けています。まず排水の扱い方ですが、この川では下（しも）の物は決して洗ってはいけないという、不文律がありました。下の物というのは具体的に言いますとおむつや下着です。これらは、たらいに水を取って洗う。洗ったものはスイモンやスイコミという貯留池に一旦ためてから前川とは異なる水系、ミゾに流し田圃にはいるようにする。またお便所にも戻す。それから家庭の中から出る水も川には流さない。一旦溜めるといことです。

このような調査をしていて、気をつけないといけないのは、ただ漫然と尋ねたのではなかなか具体的な実態がつかめないということです。例えばおじいちゃん、おばあちゃん達に「何か川の維持管理の方法はありましたか」というような聞き方をしてみてもほとんど何も答えは返ってきません。「いや、特別になんにもしてません」という。維持管理という

言葉として抽象的に概念化されているものではない、もっと行為そのものの具体的な側面をおさえないといけない。

研究用語や行政用語を、日常生活の文脈の中に、具体的な出来事や感覚の中に埋め戻さないと、すくいだせない事象です。具体的に「おむつ洗うのどうしてました」と尋ねる。すると思ひ出してくるわけです。「ああ、それはやっぱりおむつは川で洗ってはいけなかった、それでたらいに取って」「じゃあ、水を汲む時間はどうでした」って言うとな時間の規制が出てきます。「水を汲むのは朝早くで、洗濯をする時間はどうでした」「あつ、それはやっぱり日が高く昇ってだから一〇時過ぎとかそんなものだな」と時間の規制っていうのがあるわけですね。

また川の管理ということですが、川一つでもよくよく聞いてみると巧妙に手がくわえられていました。例えば、数メートルおき位に深い穴を掘っていたと云うことです。その穴には泥がたまるようになっていて、一ヶ月に一度位、そのたった泥を取り出す

わけですね。田圃や畑の肥料にしたりする。つまり、今で言うところの栄養分を川から人間側に除去するというそんな働きをしているわけです。それをたとえばこの集落では「床掘り」と言ってます。また川の成り立ちにも大変こだわっていました。この川が昭和四十年頃に一級河川に指定になって三面コンクリートにするという話が出たんですが、集落の中で大反対がおこります。何故かというと、丁度この前川というのは上からの水を流すだけではなく、川の石垣の周辺から水が湧き出しているんですね。湧き水を一部集めるところでもあるわけです。ですからコンクリートにしたらずまず崖が崩れる、水が入ってこない、そういう問題がおこる。また「三尺流れたら水清し」と良く言います。

「三尺流れたら水清し」といういわば今でいう水の自然浄化が働くためには、水底に砂があったり石があったりして、「さんぶらこ、さんぶらこせなあかんのや、そのさんぶらこしなくなるのが汚れることになるんだから」という。水をさんぶらこさせ

るというのは、栄養分の分解過程のために重要だった。そこには多量の微生物やプランクトン、また魚や貝類もいる。それらがたとえお茶碗を洗ったあとのご飯粒や大根洗ったあとの葉も食べてくれる。そこで太った貝を食べてゲンジボタルの幼虫も育ち、ホタルも飛び交う。

ですから川の構造としてですね、自浄作用をもらすように、また川の中の生き物がちゃんと暮らしていけるようにということを、地域では自覚していた。そのことで、結果として三面コンクリートではない川になっております。ただし、若い人達の間にはコンクリートにして欲しいという要望が大変強い。何故かというと掃除が楽になる、草も生えなくなるという期待がある。ただ、いざコンクリートにした所をいろいろ調べてみますと、意外と早く泥が溜まってしまったりして掃除が余り楽じゃないというのが、ここ五年、十年の動きではございます。

いろいろな意味での維持管理があった訳ですが、宗教的というのでしょうか、精神にかかわる部分も

大きい問題です。水神信仰と書いてございますが、物理的あるいは生物学的な維持管理だけではなく、やはり信仰的な部分も忘れられないものです。

この集落では毎月、お一日（おついたち）にはキヨメの塩を流しております。お一日というのは意味のある日ですね。キヨメの塩を流す、塩を流して消毒になるのかどうか、これは科学的には意味の無いことかもしれないですが、精神の問題としてキヨメをしていた。物的な汚れと精神的な汚れ、これは大変重要な二つの側面だと思います。それから「川には水神さんがおられる」ということで初物（はつもの）を流す。それは六月から七月ですね。胡瓜が出来たらその胡瓜の初物は前川に流していたということとです。物的に考えたらゴミになるのですが、水神さんへのお供え物だという感覚も大切なものではない。川には水神さんがいるから、「川にオシッコをしたらバチがあたる」ということも戒めとして子供たちに伝承されていました。

下水文化研究会の方で「川にオシッコをしたらバ

チがあたり」という伝承についてお調べになったことがありますね。その結果をみせていただきますが、このような伝承は全国的に言われていたことがわかっております。

それから十二月の大晦日の夜、「水の恩を送る」という儀礼があります。あまり大仰なものではないのですが、一家の主婦が川の横で、とんとんと手を叩いて「今年も一年おおきにさん」という、ただそれだけです。「親の恩は送れるけれど水の恩は送られれない」ということも、この地域でお年寄りの方が言っておられます。

つまり、いわば川を使いながら維持管理をするという、その利用とマネジメント（管理）が地域生活の中で有機的につながっていて、地域社会の暮らしの中に埋め込まれていたわけですね。これはモデル的に出しましたけれども、この後いろいろな地域を調べていますとかなり普遍的にいえることです。

また、今日の発表などにもございましたけれども、たとえば、江戸時代の水道ひとつでも、使う人達が

自分達で維持管理をするという、そういう社会組織というのは日本中、普遍的にあったのではないかとというのがだんだんにわかってきました。

△高度経済成長期と水のくらしの変化

― 社会変動とのかかわりで ―
このような地域社会の中に埋め込まれていた水とのかかわりが大きく変わるのが昭和三〇年代以降、高度経済成長期です。まず水道ができます。また農業の方法もかわり、自給的な肥料から購入肥料などが増えてきます。このような技術的な変化を可能にした所得の増大ということもあります。そこで人のびとの心理、あるいは願望ということをちょっと詳しく考えてみます。

まず、地域社会の中に埋め込まれていた水の維持管理は、かなりしんどい労働でした。たとえば、湖岸や川から水草や泥を引き上げる作業ですが、ジョレンというような道具で泥をかいて、舟一杯に積んで田圃に入れるようなきつい労働でした。冬の寒風

ふきすさぶ中、あるいは夏の日差しの中での労働です。でもそれが結果として、琵琶湖に栄養分を流さないという効果をもっていた。私はシャドウファンクション（隠れて機能）と呼んでいます、そのような機能があった。水草であろうが泥であろうが栄養分として田圃や畑に回さず。今でいう浄化の水際作戦ですが、それは琵琶湖を綺麗にしようとか琵琶湖に汚れを流さないということではなくて、自分達の生活の必要上やらざるを得なかった。

それが人間の労働によって成されていたわけです。その過酷な労働からのがれたいという思いが購入肥料などの増加を促した。またまた山から下草や燃料を取るというのも過酷な労働でした。ガスや電気があることは、大変な願望でしたし、福音でした。

水道についてもそうです。寒くても暑くても、水汲みに出る、あるいは外へ洗いのにでる、ということは大変なことです。たいいてい女性の仕事でした。そのような仕事から解放されたいという思いが、水道導入への動機でした。

また水道導入には、衛生上の問題もございます。

先程の知内村の前川ですが、ここで昭和三十二年まで川の水をそのまま飲み水につかっていたんです。

この村は実は江戸時代中期からずっと村の日記というものをつけています。その村の日記を辿りますと、明治末期に赤痢が流行っていました。それから昭和になってもやはり赤痢が流行ってます。そういうことで苦勞はしているわけですね。また、昭和三〇年代になって、害虫や雑草退治のための農薬も使われはじめました。ですから衛生や安全の問題として、水道が欲しいという要望が大変強くなったわけです。その結果、昭和三十二年にこの村は簡易水道を自分達の手で敷きます。これも行政の補助は少して、ほとんど自力の水道造りでした。病氣から解放されたい、過酷な労働から解放されたいという当たり前の要望のもとに水道も入ってきたわけです。

それと農村調査をしていて大きく意識するのは都会的な暮らしへの憧れです。あるいは自分達が遅れているということへの自信の無さというところ、そ

れは圧倒的に強くあります。昭和三十年代に農村部で育った多くの方が経験していることではないでしょうか。

個人的なことで恐縮ですが、私自身も埼玉県の農家で生まれ育ちました。そこでは長男以外、つまり二三男、女性ほとんど東京へ出ます。そして盆、正月に帰ってくる。叔父さん、伯母さんあるいは従兄弟達が皆白くてきれいなんです。それで母に「おじさん、伯母さん達はなんであんなにきれいないの？」と尋ねると母が言いました。「水道の水で顔を洗うからだよ」。今でこそ、水道のカルキ（塩素臭）はマイナスイメージですが、当時は「カルキの臭い」は「都会の臭い」だった。

ですから水道の水というのは、農村部にとっては、衛生的な問題あるいは労働の問題だけでなくイメージとして都会だったんですね。そのイメージとして都会であることが大変重要だったわけです。

今、平成の時代になって、都会の象徴は水洗便所です。各地の農村の環境整備計画のトップに下水道

整備があげられています。この会では下水道整備に係わってられる方が多いのでよくご存じかと思いますが、農村部でなぜ水洗便所が欲しいのでしょうか。まずコエダメ担ぐのがくさいとか重いという労働の問題があります。快適性という問題もある。それ以上にイメージの問題が重要ではないでしょうか。都会の孫が来て嫌がる。お嫁さんが来ない。孫とお嫁さんが水洗便所にする時の大きな動機の一つです。お年寄りがよく言われます。「私らだけだったらコエダメ担いででもいい」でもお嫁さんが来てくれない、孫が来たときに「おばあちゃんのとこ便所怖い」といわれるのが恥ずかしい。やっぱり都会の、あるいはその背景にある西洋文明的な暮らしへのあこがれが圧倒的な力となっています。社会的イメージというのは社会の変革を考えるととき大変重要です。個人として抵抗できるものではなく、社会全体、時代精神としてそうにつくられている。

そのような都会的なイメージをつくってきた大きな影響源としてはテレビの存在が忘れられません。

特に昭和三〇年代に戻ってみると、そのイメージの原点はいわゆるアメリカ的な豊かな消費生活です。

「白い家におおい芝生」。テレビの普及は昭和三〇年代の時代の象徴です。ちょうど美智子様のご成婚がひとつのきっかけでした。昭和三十四年の四月十日です。白黒で普及しはじめたものが、昭和三九年の東京オリンピックを境に、カラーテレビになりました。テレビが私達の目の前に運んでくれた生活イメージが、具体的な生活目標をつくりだしてくれました。テレビの中に写し出しているアメリカのホームドラマを覚えておられる方も多いと思います。

「家のパパは世界一」、「名犬ラッシー」「アイラブルーシー」、マイカーで買物にでかけ、スーパーマーケットから手に持ちきれない位の買物をしてきて、奥さんはちょっとハイヒールの先でドアを開けて、旦那さんが通してくれる。家の中に入ったらステンレスの流し台、人の背丈をこえる大きな冷蔵庫があって中には食料品がいっぱいつまっている。快適そうなソファ、白黒だったら見えないけれど

も、イメージとしては「あおい芝生に白い家」。そこには勿論水道も当たり前、大量消費の豊かな生活。アメリカでこのような大衆消費社会が成立したのは、一九二〇年代、日本で言うところ昭和初期。日本の場合には戦争という大きな事件の中で民間の生活水準の向上に技術や社会資本投下がむかわず、その遅れを一気に昭和三〇年代にとりもどそうという動きがあつた時代の生活改善です。生活水準の向上への憧れが、必死の高度経済成長の労働を支えた。

平成の現在、そのほとんどを、日本人は手にいれた。冷蔵庫の普及率は一〇〇%近い、水道の普及率も一〇〇%近い、テレビもそうですね。テレビなどは一家に二―三台。そのような生活様式を手に入れた今、私達は何を問題にしようとしているのでしょうか。あの時代あこがれたその願いがかなった今、私たちの生活様式は、今度どのようなモデルを求めているのでしょうか。

へよいとこどりはできるのか

— 現在の水汚染とは？ —

そこで四番目の話しになりますが、私達の身の回りの何が問題なんだろうということでも少し話題を展開してみます。私自身は水を差すわけではないですが、今、環境問題はどこにどのような形であるのか、ということを考えています。「臭い水」あるいは「ゴミが溢れる川」「生き物の姿の見えない川」、いずれも私たちが望んでつくりあげてきた生活様式のひとつの帰結としておきている。

たとえば琵琶湖の水の富栄養化が問題になっています。その結果、琵琶湖水を水源とする上水道の水が季節によって臭くなる。味が悪いという。今琵琶湖辺で排水がどう処理されているかみますと、皆が望んだ水洗便所の結果、屎尿が流し込まれた水が琵琶湖にはいります。し尿処理場、下水処理場の多くは湖岸に立地してるんです。もちろん、処理後の水ですが、不要になった水を琵琶湖に流すという思想が根底にはある。

かつてはそれこそ一軒一軒で汚れ物を出さない、し尿は肥料として畑に、という生活があった。あるいは少し時代がくだり、し尿処理という方式になっても、小さな町の単位くらいで処理場をつくっていた。上流から中流、下流とだんだんに途中で浄化された。下水処理やし尿処理が大規模になればなる程、処理場は最下流に立地する。そして琵琶湖地域では最下流が琵琶湖そのものです。

その琵琶湖からまた飲み水も取ってるわけですから、かつてはほとんど地域の中でそれこそ川の水や湧き水、あるいは井戸水などの「近い水」が生活に使われていた。昭和三〇年代、多くの地域が身近な水を生活に使っていた。その水道がはいり、その水道が次第に規模が大きくなり「水源を求めて琵琶湖へ」と動きができ、現在では滋賀県民の七〇%あまりが水道水源として琵琶湖を使っております。農業用水も琵琶湖水を逆水灌漑でくみあげ、琵琶湖への依存度が高まっている。言い換えるなら、琵琶湖の利用をめぐる一方で下水も流す、上水もほしいという

汚染の種類	毒物汚染	富栄養化汚染	ゴミ汚染	メタファー的汚染
汚染の原因	鉱工業、農業、生活	鉱工業、農業、生活、自然	生活、鉱工業、農業、自然	観念連合
感知手段	計測機器	計測機器・五感	五感	象徴物
背景知識	科学的因果律	科学的因果律 生活知識・文化	生活知識・文化	観念連合



社会・文化的合意形成のプロセス

(疫学的判断, 社会的公平性, 生活の必要性, 社会的秩序感)

図3 水環境汚染認識の4分類

両方の願いが大変大きくなっている。また昔からの漁業的な利用も忘れられません。レジャー空間としての観光客も増えている。このような多面的な人間の欲求に琵琶湖自身が、自然として、生態系としてこたえられるのだろうか、人間の勝手な「よいところ」ができるのだろうか、という根本的な疑問を私自身は感じております。それが現場にいるものの大きな悩みです。

そこでちょっと振り返って、私達の身の回りのきかないとか汚れとかいう、その意味を分析してみても、方向がみえるだろうか、ということを少し考えてみます。

図三にそれを現しています。水汚染という場合の汚染源、その感知の手段、それを汚染とみなす知識(判断基準)という軸で四種類の汚染を区別してみました。毒物汚染は、富栄養化汚染、ゴミ汚染、メタファー汚染です。

まず毒物汚染ですが、これは本来人間の生活の中に、勿論工業あるいは農業などで生産として必要で

あっても、生命を維持するためには欲しく無いものです。典型的なのが水俣病での有機水銀のようなものだと思います。これは目で見てもなかなか判らない。計測機器を使わないといけない。それが汚染かどうかというのは科学的な因果率あるいは疫学的な因果率を使わないといけない。最初に申しあげたところのトリハロメタンの汚染度をどうとるかという問題ともつながってきます。

それから富栄養化ですけれども、これは計測機器を使わないとわからない部分と五感で見える部分と両方ございます。専門家の皆さんを前にしてこういうお話は釈迦に説法かもしれませんが、琵琶湖のような所にありますと、例えば琵琶湖の魚を食べたら私ら病気になるんじゃないのかっていうふうなことを時々聞いたりするわけです。琵琶湖が汚い、といわれるその原因は栄養分です。勿論毒物の問題が全然無いわけじゃないんですが、主に富栄養化の問題です。ですからこの毒物汚染と富栄養化は切り分けて考えたいということです。例えばリン、窒素で

も、特に石鹼運動でもリンが問題になりましたからリンは悪物だっていうんですけど、私達、人間も含めて生物はリンという物質無しでは生きていけないわけです。窒素、リン酸、カリという生物の三要素と言われますが、本来生命の維持に必要なものです。それが有望ましい基準を越えて、あるいは有るべきではいところに過剰に増えたときに富栄養化が社会問題になるわけです。ですから科学的因果率というものも背景知識として必要ですが、生活知識とか文化の問題まで係わってくるわけです。

つまり、ある水のリンの濃度あるいは窒素の濃度はどの基準まで自分達にとって望ましいのか、鯉を飼おうとしている水域と、水をそのまま飲もうという水域では人間の願望の基準が変わってくるわけですね。それは生水を飲もうという文化、あるいは鯉を飼おうという文化、その背景によって違うということです。

それからゴミ汚染というのは五感でたどるしかありません。ゴミ汚染に環境基準が作れるのか、そも

そもゴミって何でしょうかということになる。私自身は本来ゴミになるものは無いと思っています。例えば今、目の前にあるペンでもこれは今こうやって使っていたら有用物ですが、ちょっとそのへんに落ちていて、しかも誰の物か分からない、それで使えないというときにゴミになるわけですね。ですから、物理的にゴミなるものは無く、人がそれを「不用」と見なしたときに初めて物はゴミになる。そういう意味では明らかに生活知識あるいは文化というものがゴミを作り出すという解釈が成り立つわけです。

それからメタファ的汚染というのは、象徴的に観念として汚いと思ひ込むという領域の問題です。この部分はまだまだ未解明のところなんです。穢れとは何か、汚れとは何かというかなり深い精神の問題と係わってるところだろうと思います。

こういう問題を踏まえた上で、では地域社会としてどのような環境を望ましいと思うのか、というのがこの後に出てくる実践と行動の問題になると思われます。

環境と人間のかかりについて、ここ数年来仮説的に図四のようなことを考えております。人間と環境との間には大変厚い社会／文化的な層があると思っております。今まで実は、この人間と環境との関係、人間の側と環境、特に対象を物理的に捉えるあるいは化（ばけ）学的でもいいんですが、自然現象として捉える環境と人間の間の層が薄かったんですね。私たちの想像力が貧困だった。そこをいろいろ深めてみると随分中身が厚いんだということを最近感じております。

比喩的な言い方ですが、これを「人間／環境のかかりサンドイッチ」と名づけています。かつては、薄っぺらいハムがたった一枚入っているようなサンドイッチだったのが、いろいろ調べてみればみる程、例えば調べてみる一つのプロセスがこの下水文化研究会のような活動だと思えますが、これは厚い厚いサンドイッチになっていることがわかってきた。その厚いサンドイッチというのは、バター臭い比喩ですが、例えばクラブハウスサンドイッチというのが

あります。中にベーコン、トマト、レタスなどがたっぷりとはさまれている。その厚みの中身がそれぞれ一つの哲学的、文化的、社会的層を作っているんだってことです。

私自身は、過去の研究から次の三つのレベルという領域をサンドイッチの中身と解釈しています。一つは認識レベルです。つまり先程のような何を汚いと感じるか、何を汚いと認識するかについてこの認識のレベルを「眼差し」と呼んでおります。この領域を今度ももっとと深める必要があります。それから二つめは、社会性のレベル「共有」という問題です。文化も社会も個人だけでは成立しません。それは親から子へ、子から孫へあるいはある集団の中で社会化されて、伝達されるものですから、その社会性のレベルが問題になる。具体的には、社会的な意思形成の問題なるでしょう。この認識レベルと社会層のレベルをバックにしながら、いわば働きかけ、作用のレベルが生まれてくる。

「認識のレベル」「社会性のレベル」「作用のレ

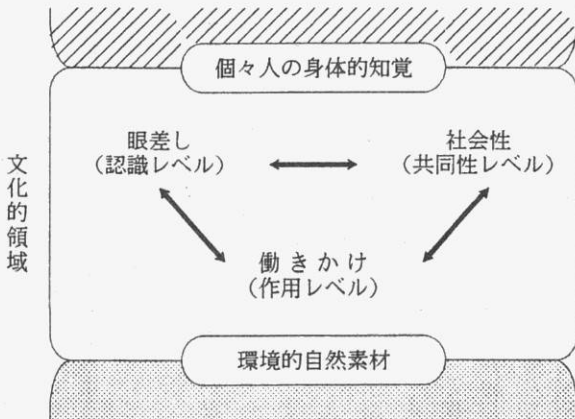


図4 主体的環境世界の構成

ベル」、今、人間と環境のかかわりのモデルを仮説的にこのような三つの領域の厚みとして考えております。

たとえば、水の使い方の変化についても、今日、岡田玲子さんがこの大会でも報告してくれたように、例えば、昔水道が入る前の用水の使い方、排水との係わり方一つでも厚みを持って調べてみると大変に深みのあることがわかってくる。またこれらを調べることで、次ぎの行動が生まれてくる。環境研究というのにはある意味で実践への展開をいつも期待されているわけです。その点を少し展開させてもらいます。

△認識から行動へー探検、はっけん、ほっとけん▽
滋賀県内のある町、蒲生町というところなんです。が、どういうふうに家庭から出る水が大きな川に入り、琵琶湖に入っているか、排水マップを作ろうというところで最初に婦人会の人達が排水マップを作りしました。その後、子供達がその排水マップを基にし

て「排水路探検」というのを始めました。そこでの方法は、小学生ですからBODやCODは難し過ぎる、そういう試薬などを使うのではなくて、目でみて、手でさわって、臭いをかいで、いわば五感でその排水路はどうなっているか調べてみようということで子供たちが集まって自分の住んでいる地区歩きをし、記録をとった。

調べていく途中であるお年寄りの人が排水路のことを「みぞっこ」言った。目の前のちっちゃな水路のことを。それで、「あれ」と思って、よく聞いてみると「このみぞっこでは洗濯もしたし大根も洗った」という。つまり生活の中で生きて水路が使われていた時代の名残の呼び方なんです。その呼び方が子供たちも気にいり、以来「みぞっこ探検」と呼ぶようになった。この活動に一緒に参加していた私自身も、それまでなんで排水路って呼んでたんだろうと反省してみた。排水路というのはある意味ではものを高見から見て、上水、排水と既に色分けしている一種のラベリング、あてはめなんです。それ

に対して「みぞっこ」というのは、その地域で生活している中でまさに生活に組み込まれた水路の呼び方なんです。こういう見え方をすることによって、実は認識過程がぐっと深まっていくわけです。

ですから最初に、排水路を五感で探検をして、

「えっ、みぞっこ？、排水路じゃないの。そう、おばあちゃん達の時代には洗濯してたの。えっ、お風呂の水ここで汲んでたの」っていうことを子供達を知り、「その溝にたくさん生き物が居た。トンボのヤゴも居たよ、ホタルが食べるカワニナも居たよ、それからいろんな物も落ちていた。空き缶が落ちている、すいがらが落ちている、この空き缶、すいがらが拾おうか」ということで皆で相談をして、子供達自身が「みぞっこクリーン作戦」というのを始めたんです。

その一連のプロセスを蒲生東小学校の井阪先生という人が「探検、発見、ほっとけん」という名付けしてくれました。これはいわば「認識」（探検）、思考「発見」、「行動参加」（ほっとけん）へと変

換していく大変重要なプロセスを表現しているわけです。自分たちの目でみて、手でふれて、頭で考えて、そして皆で話あいをして、その結果、内発的な意味あいから、「ほっとけん」という行動が生まれてくる。

こういう流れはかなり何処でも共通して持てるものだろう。今までの環境教育と最初から「ほっとけん」の中身をいわば押し付け、与えようとしていたのではないだろうか。「ゴミを拾いましょう」あるいは「花を植えましょう」、最初からほっとけんを押し付けていたらある意味ではいやでも仕方なくお付き合いでやることになる。規制あるいは強制がある間はやるけれどもその規制が無くなったらやらなくなる。そういうところから、やはり自ら問題を発見をして思考を深めて、その中から行動するということ、そういうところこそ重要ではないか、と思っているわけです。

△琵琶湖博物館の紹介―交流、行動する博物館▽

最後に琵琶湖博物館の紹介を少しさせてもらいます。博物館というと古色蒼然たる物が陳列されてると思うかもしれないんですが、もちろん大事な文化財など保存するという役割もあります。それだけではありません。私も現在計画しております博物館は地域の自然や文化について専門家だけでなく、地域の人たちといっしょに調べたり、その結果を展示したり、人と人が交流したりするそういう拠点になって欲しいと思っています。テーマは「湖と人間」なんです。でも湖そのものが、モノではありません。自然物であり、人がかかわっている環境そのものです。その琵琶湖と人間のかかわりを調査研究、展示、資料収集、保存、そして情報、交流という側面から深めていく、その活動拠点にできたらいいと思っています。いろいろな人と物と情報が相互に流れるネットワークの溜まり場のようなものではないでしょうか。

テーマは、人が住みつく前の太古の琵琶湖から、

人が住みついて以降のいわゆる歴史時代、そして現在という三つの時代を想定しています。その中から、将来の琵琶湖と人間の望ましいかかわり方を来館者の方や地域の人たちといっしょに考えていこう、という「思考する場」「交流する場」としての博物館でありたいと思っています。

その中で、下水文化研究会とかかわりの部分を少しご紹介してもらいます。ひとつは環境展示の中に、昭和三十年代の生活の中の水利用、資源利用のテーマをおいています。今日丁度岡田玲子さんの報告にあったような、家の中を川が流れていて、そこが台所になっていて、どのように水を使い、どのようにし尿などを活用していたのか、ということを復元展示いたします。

それから生活用水、排水利用の歴史の変遷については、「コミュニティ水環境カルテ」という名称で、滋賀県内にある三千自治会のうちきたら五百自治会くらいを対象にして、昭和三十年代頃、水道が入る前の用水と排水の在り方を調べて写真に残し、聞

き取り調査をして、その時代の地域毎の水利用、排水利用についてのデータベースにしていきたいと考えています。この調査は、地域の人たち自らが調べてもらって、その結果を博物館に報告してもらうという「住民参加型」の調査としてすすめております。聞き取り調査結果のデータが膨大な量になりますので、コンピュータに入力して、写真と地図、文字とセットで調べられるようないわゆるマルチメディアソフトとしてつくっております。

データベースというと、突き放した言い方ですが、それを基にして、展示室で、それぞれの地域毎の経験や記憶などを寄せてもらうきっかけにできたらいと思っています。展示空間もただ見てもらうだけでなく、実は情報を寄せていただく場として、あるいは意見を交換する場としてオピニオンコーナなども計画しています。

最初に申しあげましたけれども、環境問題については、専門家や行政マンが答えを出すのではなく、地域の人たち、当事者自らが考え、行動していくこ

とが大切です。家の前の川はきれいなのか汚いのかと、行政マンに尋ねるのではなく、専門家に尋ねるのではなく、自分たちが見て考えて、そして方向を出す、行政に要望するべきところは要望をする、という主体的な当事者意識をもった人びとが増えることが大切だと考えています。そのような人たちの思考を深め、行動を側面から支援できるように活動も現在の博物館には求められているのではないかと考えています。

そして屋外には、「トイレ展示」も計画しています。実は、ここには本物の「くみとり便所」を復元し、そのし尿を畑にいれるという一連の資源循環展示を計画し、いろいろ調べてきたのですが、博物館の建設予定地自身が、公共下水道の区域にあり、下水道法十条と建築基準法三十一条の規定により、実現できませんでした。そこで改善の方法なのですが、公衆トイレの空間に「世界のトイレの工夫」「日本のトイレの工夫」というトイレの歴史と文化についての展示空間を計画しました。トイレ展示付公衆ト

イレが多分、琵琶湖博物館には田圃とセットでお目見えすることになるだろうと思います。

琵琶湖博物館は平成八年一〇月にオープンする予定です。琵琶湖畔、草津市の烏丸半島というところ
です。開館後には皆さま、どうぞお越し下さいませ。

ご先達の皆さんを前にして生意気なことばかり申し上げましたが、私自身の試行錯誤の失敗も含めまして、過去十数年にわたる研究と実践のひとつを
ご紹介させていただきます。どうもご静聴有り難うございました。失礼します。

（*注…上の講演の背景になる評論なども含めて、
下記の書物を最近発行しましたので、ご紹介します。
嘉田由紀子『生活世界の環境学―琵琶湖からのメッ
セージ』、農山漁村文化協会、一九九五年）

